

## ◆ 基礎情報

計画名	映画館イメージフォーラムでのアーカイブ構築ならびに上映会実習
実施責任者	文芸学部文芸学科 佐藤洋
対象者	文芸学部文芸学科 3年 24名
実施期間	2025年5月～2026年1月

## ◆ 取組み概要

劇芸術演習ⅡEで学ぶ文芸学部の3年生・24名が5グループにわかれて実習を行った。渋谷にある映画館イメージフォーラムと協力して、フィルム／資料の整理・デジタル化・データ化、調査研究、上映会開催、研究発表を行う実習である。イメージフォーラムが56年にわたって行う上映会で映写された、映画フィルムとその関係資料の整理・データベース化・デジタル化・調査研究が実習の軸だ。実習対象の映像には、内外の美術館から問い合わせが多い。しかし未整理の状況ゆえに対応が困難な現状だ。実習で、映画館スタッフ・映像作家とコミュニケーションをとりながら、映像フィルムと資料を、グループワークで調査研究できる機会をいただけると同時に、私たちが整理・データベース化・調査研究した成果が、世界の映像ファン・美術館関係者に貢献できる実感を得られることが、この実習をプロジェクト化する背景である。フィルムと資料の整理/データベース化をグループワークによって実現することで、資料の取り扱い方と役割分担によって目的を実現する学びを行う。選定した映像作品について調査し、作家の方へのインタビューを行って研究することで、映像研究の手法とそれぞれが得意な研究範囲を分担することの有効性を実感。映画館での上映会を実現、自分たちの研究をまとめて発表・上映することで、個人の学びとグループの学びを広く他者に届ける体験と実感を得ることが取組の概要と目的である。

## ◆ 取組み全体の流れ

2025年4月、実習での個人の学びとグループでの学びを、共立リーダーシップの教材ならびに昨年度の取組で学生たちがつくりあげてくれた動画・ふりかえりによって学習し実習の準備を行う。

5月、イメージフォーラムのスタッフの方々から、フィルムと資料を整理する意義のレクチャーと、実習に必要な技術的な指導を受ける。フィルムと資料をグループごとに調査研究しデータ作成を行うことから実習をスタートする。

6月、フィルムの調査によって、作品内容の記録と検討をおこなう。資料の整理によって、フィルムを解釈するデータの収集をすすめる。フィルムから得た映像の内容と、資料から得た解釈の力をもとに、デジタル化/調査研究する作品をグループごとに決定する。

7月、映画館での実習を小休止する週をもうけ、各班の実習状況をふりかえり確認すると共に、他のグループとの情報交換を行う。

8月～11月、各班でそれぞれに、フィルムの研究調査計画をつくり、資料のデータ化をすすめる。デジタル化・調査研究対象作品の作家を探索し、デジタル化・上映のご許可をいただくと共に、インタビューを行う。グループを越えゼミ全体で協力して、上映会の準備と、チラシ・パンフレットの作成を行う。

2025年12月13日、イメージフォーラムにて上映会を開催する。選定しデジタル化した映像作品を上映、受付や発表・作品解説、関係者の方々との交流を行う。

2026年1月、1年間の学びを個人・グループ・映画学のそれぞれの観点から、成長したこと・もっとよく出来たことを中心にふりかえり、まとめ、次年度の3年生へのメッセージの形でまとめあげる。1年間の実習と調査研究をまとめ、研究発表を行う。以上の活動が2025年度の実習プロジェクトである。

## ◆ 取組みの成果

映画館でグループワークによって、フィルム・資料を整理・データ化・調査研究することで、学生たちは、他者の意見の尊重と自分の意見を述べることも両方の大切さを実感してくれた（参考写真：[1](#)、[2](#)）。この実習で1977～1988/2014年の上映記録・476本のフィルム/ビデオの目録をデータとして作成。選定した映像作品をグループごとに調査研究・デジタル化、作家へのインタビューを行い、12本の映像作品をデジタル化、作家のオーラルヒストリーも作成（参考映像：[3](#)）。調査研究の成果を発表する上映会を12月13日に映画館イメージフォーラムで開催、選定した作品を上映、配布チラシとパンフレットを作製した（参考写真：[4](#)。チラシ・パンフレットはリーダーシップ教育センターに提出）。これら成果物の作成を通して、学生たちは共立リーダーシップを学び、その学びを最後にふりかえってまとめた。これらが成果である。

## ◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	共立リーダーシップの教材と昨年度の学生が作ったまとめを用いて、個人とグループの目標を持ってグループワークをそれぞれが行い、ふりかえりの機会をこまめに設けることを意識した。映画館スタッフ、映像技術者、映像作家、一般の観客の方々といった学外の方々と向きあって、自分たちの活動と学びを行っていく機会を設けることで、自分とグループが、丁寧に誠実に学びを行ってコミュニケーションを取れるかを緊張感をもって意識するチャンスも得られる。それらの機会が、個人の学びとグループワークの学びを学生が実感し飛躍的に成長し得る体験になるように工夫した。
協働活動	リーダーシップGPの助成によって、フィルムをデジタル化出来ることで、学外の方々と協力して学びを行う環境が実現できた。具体的には、フィルム/資料の調査データ化、作家への取材・研究、上映会の開催、と段階的な課題を設定した。つまり、映画館スタッフ、映像技術者、映像作家、一般の観客の方々と、段階的に匿名性が高くなる相手に向きあって実現する目標を設定することで、グループワークと個人の学びのスキルを段階的に高めていく。段階ごとに、データベース/オーラルヒストリー/デジタル化映像/上映会/チラシ・パンフレットという成果物をグループで協働して創りあげることで、個人が成長を実感し、さらに次の協働活動へ向かう力としてもらうように心がけた。
共立リーダーシップの観点での振り返り	個人の目標・グループでの目標・映画学の目標を、それぞれの段階の実習で考え、うまく出来た点と・もう少しよく出来る点の両方をふりかえる機会をこまめに設けるよう工夫した。共立リーダーシップの教材と共に、教材をベースに昨年の学生たちが創ってくれた学びの工夫と指針を手本に、学生たちには目標設定とふり返りを個人とグループの両方で行ってもらった。フィルム/資料の分類・研究、インタビューの準備と実行、上映会の準備、調査研究と発表、それぞれの段階の実習によって、個人それぞれの得意分野を分担することの有効性を実感し、学びをつみあげて学生たちは進んでくれた。

## ◆ 学生の成長に関する総括

学外の相手がある、つまり期限と責任がある実習を段階的に積み上げていくことで、学生たちは緊張感の中で、自分で考えて主張することと、他者の意見に耳を傾けることの両方が、学びを高め目標を達成するために有効であると発見し体感してくれた。しかし、期限と責任が差し迫ってくる焦りの中で、学生たちが自発的に行う活動と成長をどこまで優先するか、指導の難しさがあると今年度は実感もした。昨年度の学生たちが出来たことを実現することが困難な場合も、その逆もあった。グループごとに、自分たちでスケジュールも分担もすぐに決められる班もあれば、助言が必要な班もある。学生たちの自発的な力を尊重しながら、放置されていると感じさせない程度の指導を行うことが、学生の成長、共立リーダーシップの涵養にとって難しく大切なポイントではないかと総括する。学生たちが最後につくってくれたふりかえりのまとめは、予想を遥かに越えた充実した内容で驚いた。学生たちは懸命に成長してくれた。

## ◆ 取組みを通した全体の所感

学生たちの自発的な力を尊重することと、指導を行うことのバランスは、学生たちの個性と状態によって千差万別で、その違いを見きわめて指導を行う点に共立リーダーシップ教育の難しさと貴重さがあると実感した。作業のやり方スケジュールのつくり方、研究方法のやり方、作家へのインタビューの仕方、映画館スタッフや観客の方々と接し方など、実習すべてを細かく指示することは難しいことではないが、それでは学生たちが自発的に学び協働する力の発揮を阻害する。だからといって、全てを学生たちに任せては、特に学外の方々と協働の際には、学生と大学に対する信用を貶めかねない失敗を犯す危険性があり、指導は重要である。その塩梅の判断がとても難しい。しかし、段階的に学びを積み重ねていくことで、学生たちは私の予想を遥かに超えた学びと成果を実現してくれた。学生たちの学びと成長・成果を学外の方々も喜び評価してくださった。その体験は学生たちの自信にもなったと思うし、学び教える喜びである。

## ◆ 今後の展開

2026年度も昨年度・今年度のプロジェクトを引き継いで実習を継続する。来年度は、学生たちに自分たちの学びの成果を一層実感してもらうために、成果物が社会的に評価されている事をさらに感じられるような工夫が有効だと考える。デジタル化した映像に英語字幕をつける実習を専門家の協力のもとに実現することで、自分たちの成果が世界の映画祭で評価されている実態を体感できる。また複数大学から協働の誘いを受けているので、可能な範囲で他大学へ報告発表を行う機会を設けていく事などをイメージしている。